

## 25 同仁会の機関誌『同仁』について

丁 蕾

同仁会は明治三十五年六月に日本の医療・医学を、中国およびアジア諸国に普及することを目的に設立された医療事業団体である。初代会長に長岡護美子爵、副会長に片山国嘉、理事長に岡田和一郎、評議員に北里柴三郎等が就任している。昭和二十一年二月に解散するまで六代の会長を迎えた。同会は前述の目的を達成するために、中国で病院経営・難民救済・医学教育、中国人留學生の支援等、幅広い活動を行っている。しかし、これまでその事業の歴史は十分に研究されることがない。今回北里研究所に収蔵される『同仁』『同仁会医学雑誌』を目を通すことができたので(欠号はあるが)、その内容と歴史を紹介し、同仁会研究の第一歩としたい。なお、この二誌の外に、昭和十八年六月に同会発行の『同仁会四十年史』

(非売品)も参考にした。また中国語の『同仁医学』も刊行されていたが、まだ調査に及んでいない。

明治三十九年六月一日、第二代の大隈重信会長時代に、同誌が創刊された。縦書きで、四六倍判の約五十頁の月刊である。発刊の辞に「渺たる一小雑誌に過ぎずと雖も：平和文明の大主義を鼓吹する。：支那の啓発、東西文明の調和、世界の平等あらゆる方面の評論をも併せ為す」と書かれ、同会の事業精神を宣伝する主旨を表明した。構成を目次から見れば、日中の医事衛生に関する雑文・評論・紹介を掲載する外、派遣医からの通信も収録し、会の要務も誌した。即ち要務誌を兼ねて、日中医事の相互理解を促す意図が込められているだろう。

大正五年十二月に同誌は一時中断し、十一年三月、第三代の丹波敬三副会長時代から再刊したが、十二年関東大震災後、即ち同年十月号から季刊に改め、十三年末に休刊した。

昭和二年四月、第四代の内田康哉伯爵会長時代に、總裁の久邇宮邦彦殿下より題字を賜り、五月から再度復刊し、月刊に復した。医事衛生を中心とする上に、中国の

人情・風俗・習慣・文学など文化領域の諸事情を日本に紹介し、日本国民の関心を高める方針を補充した。これは昭和八年第七巻の各号の表紙に「東亜文化之紹介医学之聯絡」というスローガンが印刷されていることから窺える。また、作者名に文学家の郭沫若、許地山、郁達夫等の名前さえ見られる。日本医界の交流においては、「報道」の欄に「中国社会時相」「中国医界時事」「日本医界時事」のコーナーがあり、不定期には「中日医薬学生談話会記事」が設けられている。

しかし、昭和十二年第五代の林権助男爵会長時代に、「蘆溝橋事変」が勃発したことにより、同誌は編集方針を貫くことができなくなった。十四年の第十二巻第五号に改題宣言が掲載されている。「：我が同仁は爾今大陸の医事衛生に関する調査研究の発表に専念し、他は一切之に触れず其の名も昭和十四年六月以降『同仁会医学雑誌』と改題せんとするものである。」

このように、同誌は一転して中国の医事衛生の研究誌となり、継続されていく。縦書きから横書きの左綴になり、約百五十頁に至った。第十五巻七号からはB5判に

拡大し、八九十頁に減頁した。内容は「原著並報告」「臨床叢報」を主とし、「衛生地誌」「講演並に集談会抄録」「内地文献抄録」等のコーナーが設けられている。各文章後に中国語の要約が付いている。「原著」は各巻五十〜五十五篇、「臨床叢報」は各巻約二十篇もあるから、その時期は中国の医事衛生に関する調査研究がピークに達していたと思われる。医学交流の文化誌としての性格が消えたが、当時中国の衛生状況、日本の近代医学の研究状況を知る貴重な資料と言えるだろう。

北里研究所収蔵の『同仁会医学雑誌』は第十八巻第十号で終わり、解散まであと何巻何号発行されたか分らないが、同誌は二回の編集方針の修正を経て、同仁会と四十余年の歴史をたどってきたことは明らかであろう。

（茨城大学人文科学研究科）